

31 『寿域神方』の瀉血療法

○友部和弘・王²⁾ 鉄策・小曾戸洋

すでに調査済みの曲直瀬道三著『針灸集要』には、約一三の中国医書が引用されており、うち以下の三書『医林集要』『寿域神方』『針灸治例』に瀉血関連記載があった。

そこで、その中の一書、明・朱権著『寿域神方』を、一五一四刊、一六二八写、内閣文庫所蔵『延寿神方（『寿域神方』は一名『延寿神方』ともいう）で精査した。本書の一・二病門には、約一七四〇の病症に対する治療法が記載されている①。①より瀉血関連記載を抽出し、分析したところ②③④の結果を得た。

①各治療法の記載数（記載数順に記す）

- (1) 薬一四五〇、(2) 灸八四、(3) 針灸併用六一、(4) その他四〇、(5) 呪法三七、(6) 針二〇、(7) 瀉血一四、(8) 薬灸併用

一二、(9) 薬針併用七、(10) 判読不明六、(11) 薬瀉血併用三、

(12) 薬その他併用二、(13) 瀉血その他併用・瀉血灸併用・針灸併用一、で薬のみの治療が全体の約八三%を占める。

針灸は(2)(3)(6)(8)(9)を合わせると一八五例、約一一%に相当する。また、巻三の針灸部では、疾病別に使用する穴を挙げ、その部位、刺針深度、灸の壮数などを詳説することから、朱権は薬のみでなく針灸をも重視していたことが窺える。瀉血は(7)(11)(13)で二〇例、約一%と極めて少ない。ただ、二〇例中一六例が瀉血単独治療であることは、江戸前中期の医家が瀉血を薬の補助としていたことと、明らかに相違する。

②瀉血記載病門と記載回数

攪腸沙四、口齒一、咽喉四、心痛一、嬰孺一、毒虫所傷一、悪獸所傷一、絞腸沙三、癰疽一、丁瘡四、中惡二の計一一病門に二三箇所あった。この一一病門は全病門の約一〇%に相当する。一方、記載回数が多い攪腸沙・咽喉・絞腸沙・丁瘡などは、瀉血が有効的な治療法と考えられていたと思われる。

③瀉血方法と記載回数

針一、陶器の破片二、三稜針一、口で吸う一、竹筒で吸う二、松針一、葱葉一、葱黄心一、無記載四の計八種、二三回。針とだけ記すものが最も多く、瀉血専用針は三稜針の一回のみ。これは、明・江瓘（一五〇三〜六五）が一六世紀以前の医家の治験例を集めて撰した『名医類案』（二五九一成）において、多く専用針を用いていたことと異なる。一方、本書には松針についての記述があり、北に面している極めて硬い老松葉を取り、束にしてそろえ硬く縛ると記されている。

④病門・瀉血部位

〔患部〕 咽喉・口内腫上。毒虫所傷・蝮に刺された所。悪獣所傷・悪犬に咬まれた所。癰疽・腫上。丁瘡・瘡心・瘡上・瘡上。

〔非患部〕 攪腸沙・委中穴青筋上・舌根の下・左腕中の筋上・右腕中の脈上。咽喉・少商・合谷と尺沢・耳門。心痛・膝腕の紫黒点。絞腸沙・両臂腕中（上肢内側屈する所）の紫筋上・十指頭・膝腕中曲秋（下肢後側屈する所）の紫筋上。丁瘡（頭面の瘡）・項間の紅糸路（細絡？）。中惡・耳鼻中（男は左、女は右）・鼻内（男は左、女は右）。以

上からすると、患部瀉血が七、非患部瀉血が一四と多い。使用経穴は、委中・少商・合谷・尺沢・耳門と上肢がやや多い。ただ、全体的にはさほど経絡・経穴にはこだわらず、比較的目立つ血管を目標としている。採血量の記載は、丁瘡門に一箇所「少」とあるのみだが、部位を考慮すれば、相当大量の採血が予測できよう。一方、毒虫や悪犬に咬まれた際、患部から悪血を吸い出す方法は、瀉血療法のものも原始段階で、これより発展したものと思われる。

以上の分析結果は、本書でも瀉血は稀な療法で、適応疾患、瀉血部位をかなり限定していた。一方、瀉血方法では特異な記載もあり興味深い。ただ、本書は治験集ではなく、どの程度本書収録の治療法が臨床的価値を有し、当時の医家が実践したかは定かでない。

（1）北里研究所東医研医史学研究所／筑波大学理療科

教員養成施設

（2）黒竜江中医药大学／北里研究所東医研医史学研究所

（3）北里研究所東医研医史学研究所